

中学校における教育相談体制の在り方

- 校内連携を中心に -

教育相談課 長期研修員 大澤重義

1 主題設定の理由と研究の目的

社会の急激な変化により、子供たちを取り巻く環境は大きく変わり、教育においても様々な問題が起こっている。学校現場で起こっている諸問題に対して、「本人又はその親、教師などがその望ましい在り方を見い出すことができるよう指導・援助する」(注1)学校教育相談の充実が図られてきた。特に平成13年度から文部科学省によるスクールカウンセラー活用補助事業が始まり、中学校における問題行動などの未然防止や早期発見、早期解決のために、学校のカウンセリング機能の充実を図ることを目的としてスクールカウンセラーが配置され、学校教育相談も新しい時代に入った。

しかし、文部科学省の平成15年度「生徒指導上の諸問題の現状について」によると、中学校における暴力行為の発生件数は約2万4千件、いじめの発生件数は約1万5千件、不登校生徒数は約10万2千人である。人間関係がつかぬ、キレるといった生徒の現れに悩む教師も増えている。

中学生は、思春期を迎え心が不安定な時期になることから、教師にとって教育相談の基盤となる生徒理解が難しい時期である。また、教科担任制が始まるため、生徒は多くの教師とかかわりをもつ一方で、学級担任とかかわる時間は小学校と比較して少なくなる。したがって、教育相談を充実するためには、教師間や教師とスクールカウンセラーなどとの連携を進めることは不可欠である。ところが、学校においては多忙な状況の中で、連携を進める難しさがあるのではないかと考えた。

そこで、生徒と教師とスクールカウンセラーを対象として、中学校における教育相談の実態を調査から把握し、連携における課題を明らかにする。そして、校内連携を中心とした教育相談体制の在り方を考察することを目的として研究を進めることとした。

2 研究の方法

- (1) 学校教育相談を推進していくための体制の整備について、文献を中心に調査する。
- (2) 中学校における教育相談の実態把握を目的として、I郡中学校4校にアンケート調査を実施する。
- (3) (2)の調査結果を分析し、在籍校における教育相談推進上の課題を明らかにする。
- (4) 在籍校において校内研修会を実施するとともに、チーム援助シートを活用する。
- (5) 今後の中学校における教育相談体制の在り方について校内連携を中心に考察する。

3 研究の内容

(1) 中学校における教育相談の実態調査及び結果

生徒に対する調査については、在籍校であるA中学校の生徒(401人)を対象に生徒の悩

みの内容や相談相手、生徒のスクールカウンセラー(以下、SCとする)へのかかわりを調査した。教師及びSCに対する調査については、A中学校の教師(20人)とA中学校を含むI郡中学校4校の生徒指導主事(4人)教育相談係(1人)養護教諭(4人)SC(4人)といった各学校の教育相談の中心的な役割を担う担当者(以下、担当とする)を対象に実施した。なお、生徒指導主事には、教育相談体制の実態、担当と教師には、SC活用状況の調査項目を設定した。アンケート調査項目は、資料1のとおりである。回答方法は、選択式を主として一部は自由記述式とした。

【資料1】アンケート調査項目

調査項目	I郡中学校			A中学校		
	生徒指導主事	教育相談係	養護教諭	SC	教師	生徒
生徒の学校生活に関する調査						
学校生活の満足度						
学校生活における悩み						
悩みの相談相手						
SCとの相談						
学校における教育相談の体制について						
意識	教育相談のとらえ方					
	厳しい指導と受容					
	生徒との信頼関係づくり					
	生徒との関係で困ること					
組織	相談係の位置付け					
	活動	計画、研修、施設・設備				
		定期的な教育相談の回数				
		開発的・教育的教育相談の内容				
面接相談の回数・内容						
連携	情報交換の回数・方法					
	連携で工夫していること					
	連携における課題					
	個人指導経過の記録					
SCの活用	問題行動の対応チーム					
	家庭との連携の問題点					
	SCに対する意識・要望					
	SCから学校への要望					
	SCの仕事内容・問題点					
	SCとの連携					

実施時期は、事前の生徒指導主事からの聞き取りで夏季休業後に問題行動が増加する傾向があることから10月とした。(回収率は、担当及び教師は100%、生徒は94.8%)

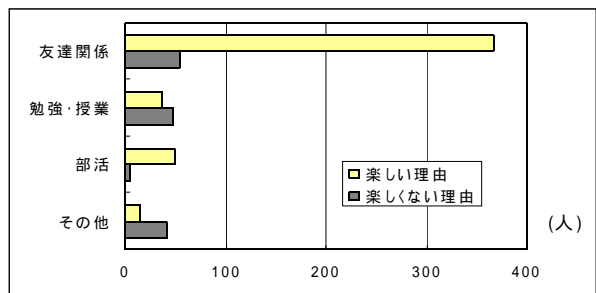
ア 生徒に対する調査結果

(ア) 学校生活における満足度と悩み

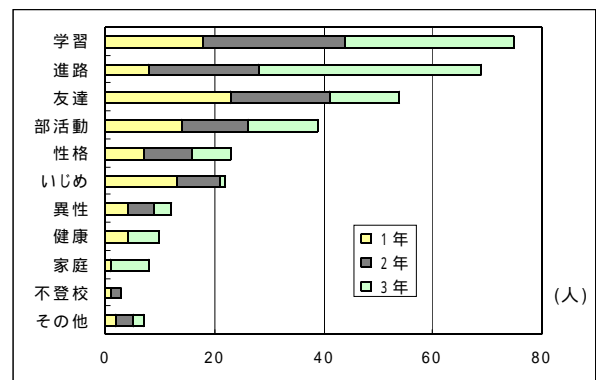
学校生活における満足度については、83.4%が楽しいと答えた。楽しい理由として、「友達がいる」といった友達関係をあげた生徒がほとんどであった。楽しくない理由としては、「勉強がおもしろくない」「友達関係がよくない」ことをあげた生徒が多かった(資料2)。

学校生活における悩みについては、40.3%の生徒が悩みがあると回答した。悩みの内容としては、「学習内容」(75人)、「進路」(69人)が最も多かった。学年別に見ると、学習・進路の悩みは、1年生から3年生に進級するにつれて

【資料2】学校生活が楽しい、楽しくない理由(生徒380人、複数回答)



【資料3】学校生活における悩みの内容(悩みがあると回答した生徒153人、複数回答)



多くなっていた。1年生は「友達」に関する悩みが最も多かった（資料3）。

調査結果から、生徒は、学校生活にある程度満足していることが分かった。そして、生徒にとって学校生活を送る上で友達関係が大きな比重を占めていることが読み取れた。特に、複数の小学校から入学をしてくる1年生は新しい友達関係をつくることから、その比重はさらに大きいと考えられる。

(イ) 悩みの相談相手（資料4）

「悩んだときにだれに相談しようと思うか」という設問に対して、ほとんどの内容で、「だれにも相談しない」という回答が最も多かった。すべての内容で「だれにも相談しない」を選んだ生徒は全校で27人（7%）だった。

悩みの相談相手は、「友達」「母親」「父親」「担任の先生」の順であった。「先生に相談する」を選択した中で、学習内容については「その他の先生」、進路は「担任の先生」、健康発達は「保健の先生」、部活動は「部活の先生」が多かった。

中学生の時期は、「他人に自分を理解してもらいたいと願いながら、自分の本心は隠してしまう。」（注2）と言われている。調査結果からも、生徒は悩みを相談しない傾向があることが分かる。また、多くの内容で生徒が友達や母親を相談相手として考えていることや悩みの内容で相談相手を選択していることは、生徒理解を深めたり、指導・援助を行ったりする上で留意しておく必要があると思われる。

(ウ) スクールカウンセラーとのかかわり

SCに相談したことのある生徒は、380人中7人（1.8%）であった。相談のきっかけは、「先生・親・友達に勧められて」「自分から」「SCに呼ばれて」という回答であった。相談した時の気持ちとして「話して楽になった」「すごく元気が出た」「素直に話せた」という感想があった。

相談しなかった理由は、「相談することがない」（272人）、「他に相談できる人がいる」（52人）、「SCがいることを知らなかった」（25人）、「相談しようと思ったが行かなかった」（7人）であった。相談しようと思ったが行かなかった理由は、「相談室に入りづらい」「どのように相談すればよいか分からない」などであった。

【資料4】悩みの相談相手
「悩んだときにだれに相談しようと思うか」
（生徒380人、複数回答）（人）

悩みの内容 相談者	学習 内容	進路	性格 行動	健康 発達	家庭	部活 活動	友人	異性	いじ め	不登 校	合計
だれにも相談しない	39	52	135	137	149	78	98	149	134	185	1156
友達	124	73	110	50	78	153	164	160	105	51	1068
母親	119	215	88	117	78	51	58	19	59	64	868
父親	59	126	25	30	41	21	14	4	22	24	366
担任の先生	77	91	9	6	11	6	23	6	55	29	313
兄弟姉妹	59	34	28	10	24	25	15	13	16	18	242
保健の先生	3	7	14	65	14	11	29	16	34	26	219
その他の先生	83	33	0	2	1	4	5	2	9	4	143
部活動の先生	3	4	1	1	0	112	4	0	3	1	129
先輩	5	5	2	1	1	21	6	3	5	2	51
祖父母	1	9	2	3	11	2	2	0	3	5	38
SC	0	0	2	0	2	1	5	2	9	9	30
親戚	5	7	0	1	4	0	1	2	1	2	23
地域の人	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	3
電話相談の人	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
その他	15	8	3	2	1	1	2	3	4	1	40
無答	31	31	41	38	38	36	36	37	38	44	370
合計	623	695	460	463	454	523	463	416	497	466	5060

注) 丸で囲まれた数字は悩みの内容別の順位を表す。

SCに相談をしたことのある生徒はSCのよさを認識しているが、悩んでいることがあると回答している153人の生徒を含めたほとんどの生徒は、SCの存在や役割についてあまり理解をしていないと考えられる。

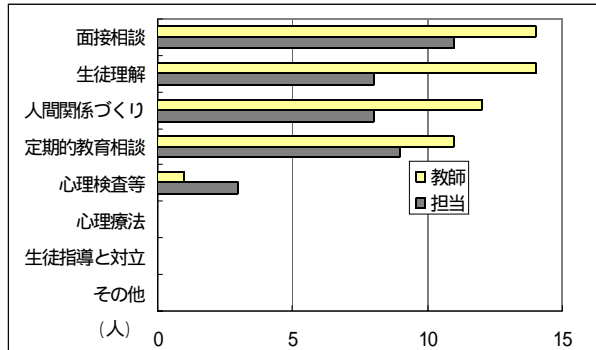
イ 教師・スクールカウンセラーに対する調査結果

(ア) 教育相談に対する意識

a 教師・担当

教育相談のとらえ方については、担当と教師との間で大きな違いは見られず、面接相談、生徒理解、人間関係づくり、定期的教育相談が偏ることなく回答された(資料5)。ただし、心理検査等については担当の回答する割合が教師より高かった。

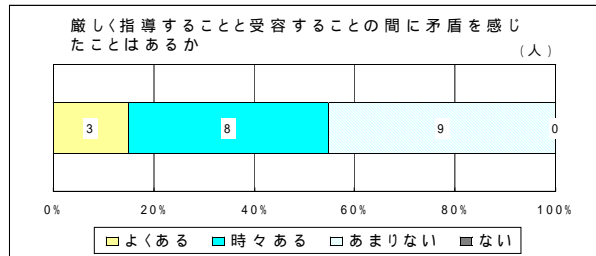
【資料5】教育相談のとらえ方(A中学校 教師20人、郡内担当13人、複数回答)



b 教師(A中学校)

生徒との信頼関係づくりに関しては、「わかりやすい授業をする」(19人)、「話し掛ける場を多くもつ」(15人)、「話をよく聞く」(14人)、「よいところを見つけてほめる」(13人)などが回答された。一方では、11人(55%)が「厳しく指導することと受容・共感的態度をもって接することの間に矛盾を感じている」と回答していた(資料6)。その理由として、「厳しく指導しても聞き入れない生徒、共感的に接しても本音を打ち明けない生徒がいる」「受容ではなく妥協の態度になる」などが回答された。

【資料6】厳しい指導と受容・共感的態度 (A中学校教師20人)



教師が感じている面接相談の課題としては、「相手が話さないため話が續かない」「相談されたことに対する解決方法が分からない」などの回答があった。

以上の調査結果から、教育相談に対するとらえ方は、担当と教師との間で大きな違いが見られず、教育相談に対する共通理解はほぼ図られていると考えられる。しかし、実際の教育場面において厳しく指導することと受容することの間に矛盾を感じている教師は多く、「厳しく指導しても聞き入れない生徒、共感的に接しても本音を打ち明けない生徒」にどのように対応すればよいのかが教師の感じている指導・援助上の課題であると思われる。

(イ) 組織・教育相談活動

すべての学校が、教育相談係を校務分掌の生徒指導部に位置付けており、生徒指

導主事が教育相談係を兼任している学校は4校中3校だった。

教育相談の年間計画については、すべての学校が作成していると回答した。

校内研修会については、3校が状況に応じて実施していると回答した。その具体的内容は、問題を抱える生徒の理解と対応、教育相談の考え方・進め方、カウンセリング実習などで、事例研究会を実施している学校はなかった。

専用の教育相談室がある学校は2校で、他の教育活動と併用している部屋を含めれば、すべての学校に教育相談用の部屋があった。

予防・開発的教育相談活動については、日記指導、あいさつ運動、1分間スピーチ、薬学講座、思春期講座などがその実施内容として回答された。

定期的な教育相談について

は、すべての学校で年間2～3回実施をしていた。定期的な教育相談を除く面接相談で、担当及び教師が行った人数と回数については、資料7

【資料7】面接相談の人数と回数(4月から10月)

	生徒指導・相談係		養護教諭		SC		教師	
	人数	延回数	人数	延回数	人数	延回数	人数	延回数
生徒	10人	17回	41人	85回	10人	32回	13人	16回
保護者	8人	13回	7人	12回	16人	51回	5人	5回

注)人数・延回数とも、一人当たりの集計である。

のような結果であった。SCは他の担当や教師と比較すると、1人の生徒に対する相談回数が多く、またその相談は生徒よりも保護者の方が人数・回数とも多かった。

教育相談係の位置付け、年間計画の作成、校内研修会の実施、教育相談室の設置、予防・開発的教育相談の実施などの状況を見ると、教育相談の体制については整備が進んでいることが分かった。これは、「心の教育」の推進やSCなどの配置の成果であり、今回の調査対象である4校を含め、多くの中学校において、教育活動の中で教育相談を重視するようになってきている表れであると思われる。

(ウ) 校内連携

各学校では、校長、生徒指導主事、養護教諭、学級担任、SCがそれぞれ定期的な情報交換を月に平均4.7回行っていた。定期的な情報交換の場を設定していたり、書面で情報交換をしたりしている場合が多かった。個人指導経過を記録している学校は2校だった。

校内連携については、各学校が、組織の活用、教師間の人間関係への配慮などの工夫を行っていたが、校内連携における問題として、「十分な話合いの時間をもつことができない」「話したい先生と話す時間がない」「相談内容の秘密保持について理解が図られていない」「役割分担が明確になっていないため、情報がうまく伝わらない」といった回答が挙げられた。

すべての学校が、「問題行動が表れた場合にチームをつくって対応する」と回答しており、その構成員には、生徒指導主事、学年主任、学級担任、養護教諭が含まれていたが、SCはどの学校にも含まれていなかった。また、問題行動が表れた場合に保護者との連携を図る上で苦慮する点として、「保護者の問題意識が薄い」「学校側の説明を聞こうとしない」「子供に秘密にしておきたい事実を親が話してしま

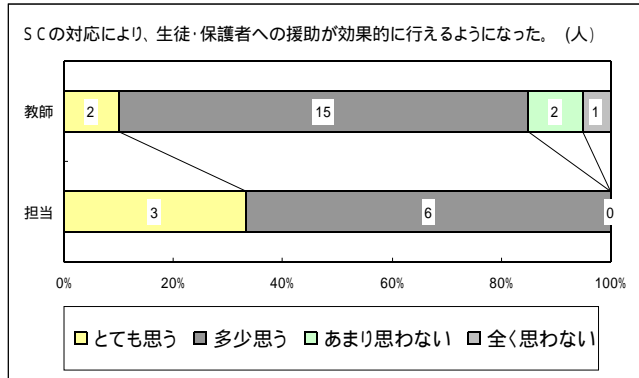
う」「次第に家庭の方で指導しきれなくなる」などの回答が挙げられた。

校内連携については、各学校で連携を進める工夫をしているが、校内における教師間や担当との情報の共有に課題があると考えられる。

(I) スクールカウンセラーの活用

SCの対応により生徒・保護者への援助が効果的に行えるようになったと答えたのは、教師及び担当（SCを除く）の90%であった（資料8）。その理由として、「専門的な立場で話をしてくれるので保護者が信頼してよりよい方向を探ろうとする」「SCは校外の職員という印象が強いため生徒・

【資料8】SCの効果（教師20人、担当9人）



保護者が話しやすい」「生徒が落ち着いてきた」「アドバイスにより今後の対応が明確になった」などが挙げられた。また、課題や要望として、「情報交換をする時間がなく、SCからの情報が伝わりにくい」「不登校生徒の対応で、生徒を学校へ来させることより本人の気持ちを大切にする」「学校に提言したり進言したりしてほしい」「生徒への対応をどのように行うべきか教えてほしい」「常時学校にいてほしい」「反社会的な問題を抱える生徒にも対応してほしい」などの回答があった。

逆にSCから学校に対しての要望としては、「ケース検討の重要性をもっと認識してほしい」「SCの仕事をもっと理解してほしい」「もっとSCを活用してほしい」などの回答があった。

SCに対する生徒の相談人数は少ないにもかかわらず、教師及び担当の90%が、生徒・保護者への援助が効果的に行えるようになったと回答している。これは、問題を抱える生徒や保護者への対応に悩む教師が、生徒・保護者が話しやすく、具体的に対応をアドバイスしてくれるSCを評価していることの表れと考えられる。

今回の調査からは、問題を抱える生徒への対応チームの構成員にSCが含まれていないという実態があることが分かった。これは、問題が発生したときにチームが編成されることから、非常勤勤務であるSCが構成員として入りにくいという状況があることが考えられる。

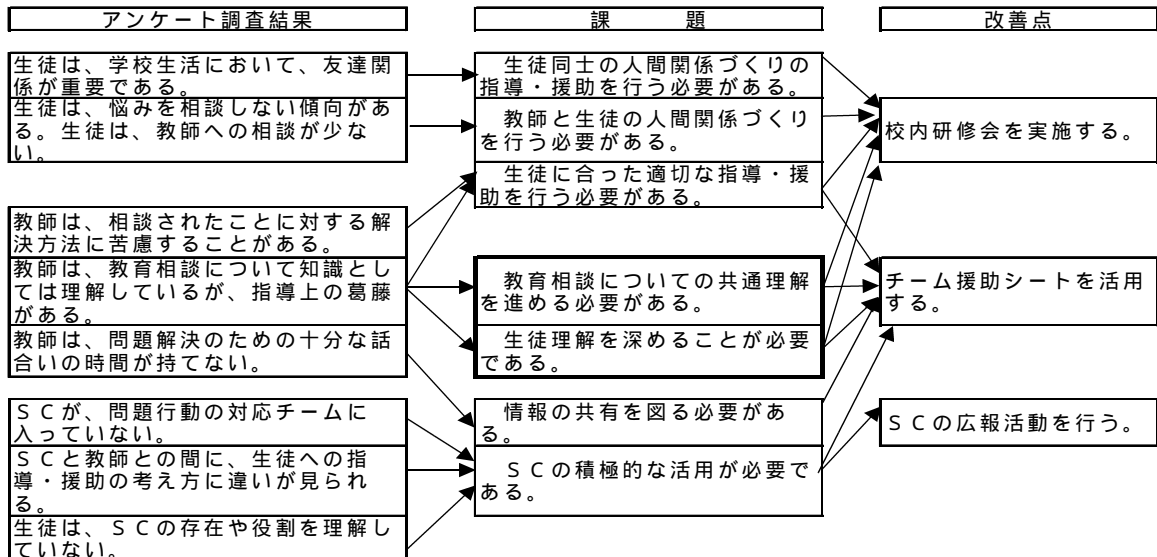
教師とSCとの間には、生徒への指導・援助の考え方において違いが見られた。例えば不登校生徒への対応を巡って、教師はSCに対して、できるだけ早い時期の再登校につながるよう指導してほしいと願い、SCは教師に、一人の人間としての成長という視点から指導・援助を進めるSCの仕事を理解してほしいと願っている。これは、教師の1年間で（または3年間で）生徒を指導・援助したいという考えとSCの考えとの違いが表れたものと思われる。今後は、このような考え方の違

いを理解した上で、問題を抱えた一人の生徒に対して、それぞれの立場で何ができるかを考えた連携を行うことが必要である。

(2) アンケート調査のまとめ

アンケート調査の結果から A 中学校における教育相談活動推進上の課題を資料 9 のとおりまとめた。

【資料 9】 A 中学校における教育相談活動推進上の課題



- 、 、 は、教育活動の中で、教師の生徒に対する指導・援助に直接かかわる課題であり、活動における連携が必要であると考えた。
- 教育相談活動を充実するためには、すべての教師が共通認識をもって教育相談を進めることが大切である。しかし、教師は、教育相談を知識としては理解しているが、実際の教育場面では指導・援助を行う上での葛藤をもっている。このことが教育相談活動推進上で最も大きな問題であると考え、 を設定した。教育相談についての共通理解を深めるためには、生徒指導と教育相談の関係を確認した上で、 生徒理解を深めることが必要であると考えた。
- 情報の共有は、 適切な指導・援助を行ったり、 生徒理解を深めたりするために必要な連携上の課題である。
- S C は、教育相談機能の充実を図る目的で配置をされているが、その活用は十分とは言えないことから、 を設定した。S C と教師とが相互理解を深め、S C が対応チームへの援助をしたり、教師の生徒理解を深めるための助言をしたりしていく必要がある。

(3) 在籍校における教育相談活動推進のための実践

資料 9 で整理した教育相談活動推進のための改善点のうち、校内研修会の実施とチーム援助シートの活用について、実際に A 中学校において実践を行った。

ア 生徒理解を深める校内研修会

教育相談についての共通理解を進めることと生徒理解を深めることを目的として校

内研修会を企画した。教師同士がまず互いに悩みを出し合ったり、話し合ったりするなど自己開示することにより、生徒理解を深め、生徒の内面に寄り添った指導・援助ができると考えた。

(7) 校内研修会の実施

校内研修会は2回実施した。第1回研修会(11月中旬実施)では、教育相談に対する意識のアンケート結果を伝え、教育相談の考え方については共通理解が図られつつあるが、実際の教育活動場面では厳しい指導と受容・共感的態度の矛盾に悩む教師が多いことを説明した。そして、河合隼雄氏の「子供への対応において、カウンセラーはどれほど母性としてのかかわりを深めえたかが重要である。その深さだけ父性としてのかかわりをもつことができる」(注3)という言葉を用いながら、生徒指導、教育相談を行う上での基本姿勢を確認した。その後、二人組になり、「気が乗っていない聞き方・威嚇的な聞き方」と「前向きな聞き方」をそれぞれ交互に体験するという実習を行った(時間60分)(資料10)。

【資料10】「聴く」実習の様子



第2回研修会(12月初旬実施)は、生徒の学校生活に関する調査結果の概要を伝えた上で、問題行動の理解と対応について説明した(時間30分)。

校内研修会における感想例は、資料11のとおりである。

【資料11】校内研修会の感想

< 第1回研修会の感想 >

- ・アンケート結果について自分と同じ考えの人が多くいることが分かって安心した。
- ・実習をして自分自身が不快だったり不安に思ったりしたことは生徒も同じだろうと思った。
- ・普段の自分の生徒に対する話し方について振り返ることができた。

< 第2回研修会の感想 >

- ・アンケート結果を見て自分自身と子供のかかわりを改めて見直すことができた。
- ・生徒理解の在り方について視野が広がった。

(1) 考察

生徒理解を深めるためには、「生徒の立場に立って、生徒の感情をそのまま理解しようとする」(注3)共感的な理解が大切である。相手を理解しようとするときには、まず自己と向き合い、自己理解を深めることが重要である。参加者が、話を聞いてもらえないときの不安な気持ちを感じたり、自分の生徒への話し方を振り返ったりして自己に向き合ったことは、生徒理解への第一歩ではないかと考える。

イ 連携を深めるチーム援助シートの活用

最近の生徒の問題行動の要因は複雑で、学級担任一人で対応できるものではないことが多いため、教育の専門家である教師同士が、あるいは教師と心理臨床の専門家であるSCが、チームを組んで対応していくことが必要となる。これをチーム援助とい

【資料12】チーム援助シート

町立 中学校				平成 16 年 10 月 20 日 (水)		No(2)											
生徒氏名				所属		担任											
<p style="text-align: center;">チーム援助シート</p> <p style="text-align: right;">取扱注意</p>																	
<p>問題の概要 (いじめ)</p> <p>・10/5 B男からA男にいじめられているという相談があった。遊んでいるときに、自分の悪口を言われたりプロレスの技をかけられたりするということがあった。A男にそれとなく聞いてみたが、いじめられているという自覚はなかった。しかし、周りの生徒からも避けられているようである。</p> <p>・授業に集中して取り組めない。授業中、席を離れたり、大声を出したりする。</p>																	
本人の状況	学習	学習状況	<p>・成績は下位。特に数学・英語が苦手。こつこつと学習することができない。体育や技術など体を動かしたり、作業をしたりすることは好き。</p>														
	出席状況	出席状況	<p>・欠席はほとんどない。遅刻は時々ある。</p>														
	心理・社会	家庭環境	<p>父 (歳・会社員) 母 (歳・パート) 姉 (16歳・高校生) 本人 弟 (4歳)</p> <p>・父は厳しい。気に入らないことがあると手が出ることもある。母親は弟にかかり切りで本人とはあまり話をしないようである。</p>														
	生育歴 友人関係 その他	生育歴 友人関係 その他	<p>・B男、C男とよく遊んでいるが、そのほかの友達が少ない。</p> <p>・担任と話をするができる。</p>														
	進路 健康	希望 健康状況	<p>・高校進学を希望している。</p> <p>・バスケットボール部に所属。レギュラーに後一步。</p> <p>・アトピー</p>														
<p>背景</p> <p>・家庭での愛情不足から、寂しい思いをしているのではないか。</p> <p>・コミュニケーション能力が低いために、学校でも寂しい思いをしているのではないか。</p>																	
月日		経過 (出来事、援助したこと、結果等)				情報提供者											
10/14		・C男と話したところ、A男の暴力的なところは気になっているが、やさしいところもあるという話をしていた。				担任											
10/15		・A男が頭が痛いと言って保健室に来室したので、家庭の様子を聞いてみたところ、父親が怖いと言っていた。				養護教諭											
順位		援助策				援助者 期日											
1		学 作業的な活動を取り入れた授業を工夫する。				教科担任											
2		心 A男の良さを紹介する場を設ける。				担任 11月											
1		A男の授業態度が悪いときには指導する。				学年主任											
1		保護者と面接をし、現在の状況を伝える。SCを紹介する。				担任											
1		進 本人が将来的にどのような職業に就きたいのか聞く。				担任 10月											
1		健 A D H D の可能性がないか、学年で観察を続ける。				学年 10月											
出席者名						記入者名											
<p>次回開催予定日 11月4日(木)</p>																	
<p>確認したいこと</p> <p>・A男の姉の時も人間関係でトラブルがありました。(生徒指導主事)</p> <p>・B男も人に頼りたいという気持ちが強いので、援助をお願いします。(養護教諭)</p> <p>・人間関係づくりの活動を継続してお願いします。(校長)</p>						<table border="1"> <tr><td>校長</td><td>10/25</td></tr> <tr><td>教頭</td><td>10/23</td></tr> <tr><td>教務</td><td>10/23</td></tr> <tr><td>養護教諭</td><td>10/22</td></tr> <tr><td>生徒指導</td><td>10/21</td></tr> </table>		校長	10/25	教頭	10/23	教務	10/23	養護教諭	10/22	生徒指導	10/21
校長	10/25																
教頭	10/23																
教務	10/23																
養護教諭	10/22																
生徒指導	10/21																
<p>SCより ・対人関係をつくるのが苦手な生徒かも知れません。家庭対応が必要です。</p>																	

注) 資料は筆者が作成し、記載内容は架空のものである。

う。このチーム援助会議で「チーム援助シート」(資料12)を活用して、情報の共有や適切な指導・援助を行おうと考えた。なお、通常、チーム援助会議は全校体制で行う場合が多いが、本研究では、定期的に生徒についての情報交換や指導・援助についての話し合いが行われている学年会もその場とした。学年会を機能させることが中学校においては有効であると考えたからである。

(7) シートの内容

チーム援助シートは、問題の概要、本人の状況、背景、経過、援助策、確認したいこと、SCよりの項目で構成した。石隈氏の考え方(注4)を参考にし、多面的な生徒理解を行い、適切な指導・援助に生かすことができるように、本人の状況、援助策の中に学習面、心理・社会面、進路面、健康面の欄を設けた。確認したいこと、SCよりの項目は、関係者(校長、教頭、生徒指導主事、養護教諭、SC)に回覧し、関係者の持っている生徒に関する情報や指導上の意見及び具体策を記入する欄である。これは、チーム内の教師や関係者に普段自分が見ていない生徒の姿などの情報の共有を図り、新たな生徒理解を促進することをねらいとしている。

(イ) シートの使い方

シートは、資料13のような手順で使う。パソコンを使うことにより、日常の生徒情報がデータとして蓄積される。このデータは、学校全体で行うチーム援助会議や学年会での資料として使うことにより、情報の共有がしやすくなるを考える。また、次年度への引継ぎも容易になる。

【資料13】チーム援助シートの使い方

<第1回援助チーム>
会議が始まる前に、パソコンを準備しておき、記録者を決めておく。
学級担任は、対象となる生徒の問題の概要、本人の状況を報告する。
記録者は、報告をパソコンのシートに記録していく。
参加者から質問や情報を出し、本人の状況に必要な部分を付け足す。
問題の背景について検討する。
背景を基に援助策を考える。
次回開催日を決める。
回覧をする。(校長・教頭・教務主任・養護教諭・生徒指導主事・SC)
学級担任は、回覧後の「確認したいこと」や「SCよりを参考にし指導援助を進める」シートを個人ファイルに保存する。

<第2回以降の援助チーム>
担任は、前回からの出来事、援助・結果を報告する。
前回のシートを使い報告を経過の欄に記録していく。(以下は、第1回と同じ進め方)

(ウ) チーム援助シートの実践

A中学校の2年生のチーム援助会議でシートを活用した。1回目は、11月上旬に行われ、参加者は8人で、筆者が記録をした。対象生徒は10人であった。学級担任から問題の概要、本人の状況、経過が報告された後、援助方法について話し合いが行われた。会議時間は1時間50分であった。

会議後、回覧者に対して、事前に目的と内容を説明した上で、生徒指導主事がシートの回覧を行った。すべての回覧者が目を通し、の欄に必要事項を記入するまでに2週間を要した。回覧後、校長などから、校内運営のかなめになっている教務主任を回覧者に含めた方がよいという指摘があった。

11月下旬に2回目のチーム援助会議を行った。参加者は8人、対象生徒は前回と同じ10人であった。回覧済の前回のシートを印刷し、参加者に提示したことで、話し合いの焦点化が進み、限られた時間の中で援助策について話し合う時間を十分かつ効率的に取ることができた。会議時間は1時間20分であった。

2回目の回覧者には、教務主任を加えた。チーム援助会議で情報が多く出されたり、援助策の変更・追加があったりした生徒5人のシートを回覧した。回覧期間は1週間だった。

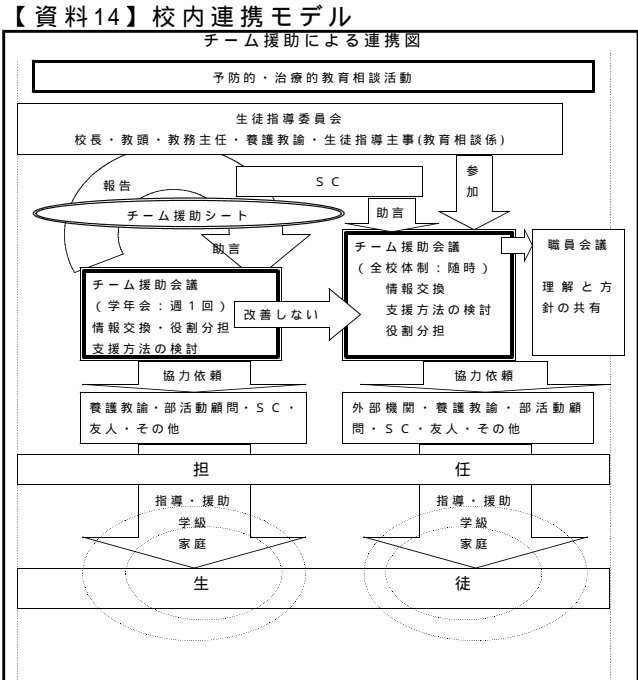
(I) 考察

会議に参加した教師から「生徒の状況を整理しやすく生徒理解が深まった」「援助の視点がはっきりしていて援助策を考えることができた」「担任以外の援助も提案された」「養護教諭やSCからの助言は援助策を考える上で参考になった」という感想があった。また、回覧者からは、「生徒の表れや問題行動の経緯が分かった」「先生方の願いや援助策が分かった」という感想が見られた。これらから、このシー

トの活用により、情報の共有を進め、具体的な援助策を考えることができると同時に教師間や教師とSCとの連携が進んだものと考えられる。

(オ) チーム援助シートを使った校内連携モデル(資料14)

今回の実践は、2回の学年会をチーム援助会議の場としたものであったが、今後は、学年を中心とした援助チームが対応することを第一段階とし、改善しない場合や危機的な状況の場合には、第二段階として全校体制による援助チームが対応するという方法を提案したい。こうした一連の流れを明確にしておくことで、それぞれの役割に対する共通理解も図りやすくなると思われる。



注)以下の資料を参考に筆者が作成
出典)栗原慎二著『新しい学校教育相談の在り方と進め方』,ほんの森出版,2002年,63ページ

(4) 中学校における教育相談体制の在り方の考察

今回の研究を通して、中学校において校内連携を中心とした教育相談体制の充実を図るためには、教育相談係の果たす役割が重要であることを改めて認識した。そこで、教育相談係の役割を中心として、今後の教育相談活動を進めるための重点について述べる。

教育相談に対して、すべての教師が共通理解を図ることは、連携上の大きな課題である。中学校において、校内研修会は、共通理解を図るための有効な手だてとなることから、教育相談係は、研修会の内容や方法を工夫し、実施することが大切である。研修会の内容としては、「教育相談の考え方・進め方の共通理解」「問題を抱える生徒の理解と対応」「事例研究会」「人間関係づくりのための実習」などが考えられる。方法の工夫として、知識や理論を学ぶだけでなく、実習などを取り入れ体験的な学習の場を設けていきたい。実践した第1回研修会で生徒の気持ちを推察する感想が見られたのは、「聴く実習」を取り入れることにより話を聴いてもらえない気持ちを教師自身が実感をもって経験したためと考えられる。また、参加者のニーズを把握し、研修意欲を高めるように工夫することも大切である。今回の実践でも生徒や教師のアンケート結果の報告をしたことで、研修意欲が高まったと思われる。なお、実施に当たっては、校内研修会を教育相談年間計画に組み入れ、研修主任と事前の打合せをすることが大切である。

「情報の共有」や「適切な指導・援助」のためにチーム援助シートの活用を行った。チーム援助会議を開催する場合には、まず教育相談係が、会議の招集や記録者の選定などを行い、決定された援助策について会議の構成員以外の援助者に協力依頼する。同時

に、職員会議などで問題の理解と対応の方針の共有を図り、全校体制で問題に対応できるように連絡調整を行うことが大切である。特に、問題行動が発生した場合における生徒指導主事と教育相談係との役割分担を確認しておくようにしたい。また、学年会で行われるチーム援助会議においても、学年と連絡を取り合い、内容を把握しておくことが必要である。

ＳＣの生徒への広報活動として、始業式や帰りの会、給食などでＳＣを紹介することが考えられる。また、生徒への広報のためには、教師がＳＣの活動や役割を理解していることが必要である。教育相談年間計画にＳＣの活動を位置付け、職員会議などでＳＣの役割について教師の共通理解を図りたい。また、職員室におけるＳＣの座席を教育相談係や生徒指導主事、養護教諭の近くに配置したり、生徒指導委員会の開催日とＳＣの来校日とを合わせたりすることでＳＣとの連携が図りやすくなる。教育相談係は、調整役として、教育相談の方針や生徒の情報をＳＣに伝えるとともに、ＳＣの考えやもっている情報を教師に伝えることが必要である。

4 研究のまとめ

- ・ 教師は、教育相談の考え方を知識としては理解しているが、実際の教育場面では、指導・援助を行う上での葛藤があることが分かった。そのためには、教師が互いに悩みを共有し話し合う場が必要で、校内研修会やチーム援助はその有効な場である。今後、更に内容・方法に改善を加えながら、生徒への実際の指導・援助に活用していきたい。
- ・ 教師は、ＳＣの配置により教育相談活動推進に効果が上がっていると感じているが、その活用は、十分ではないことが分かった。ＳＣの校内研修会への参加やチーム援助シートを使って連携を進めていくことにより、生徒が「望ましい在り方を見い出す」指導・援助が充実すると思われる。
- ・ アンケート結果やチーム援助会議での話し合いなどから、保護者への対応が課題として挙げられた。生徒理解を深めるための研修が保護者の理解に役立ったり、校内体制を充実させたりすることで教師が孤立することなく保護者との連携が図りやすくなると考えられる。さらに、保護者との連携の手だてを考えていきたい。

注

- 1) 文部省児童生徒課『生徒指導資料第21集 生徒指導研究資料第15集 学校における教育相談の考え方・進め方(中学校・高等学校編)』, 文部省, 1990年, ページ.
- 2) 落合良行編著『中学一年生の心理 心とからだのめざめ』, 大日本図書, 1998年, 71ページ.
- 3) 静岡県立教育研修所『教育研究79 教育相談の望ましい在り方に関する研究』, 静岡県立教育研修所, 1992年, 78 - 80ページ.
- 4) 石隈利紀著『学校心理学 - 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス - 』, 誠信書房, 1999年, 16 - 25ページ.